

# 中島敦『弟子』の成立過程について

木村東吉

## 一 はじめに

中島敦の『弟子』については、奥野政元氏が整理されたように、壁画・絵巻物風の構成の作品と見る水上英廣氏の見方もあったのだが、篠田一士氏が、エピソード的な各章を積み上げ、これをドラマティックな終章でまとめたとする見方を示されてから、大体中島の代表作の一つに数えられるようになった<sup>(1)</sup>。以後、佐々木充氏による素材との比較研究<sup>(2)</sup>があり、木村一信氏や濱川勝彦氏が、作品の構成に関して三部構成説を提出され、作品構成に関する大枠の見方は定着したかに見える<sup>(3)</sup>。

だが、その一方で、作品の成立過程に関しては、疑問が残されている。成立時期については、郡司勝義氏が筑摩書房版『中島敦全集』第一巻(昭51・3)解題で、草稿末尾の「昭和十七年六月二十四日夜十一時」とある作者のメモを指摘し、「草稿と浄書原稿との間には用字の違いを除いて殆んど大差がないところから、これが脱稿した日付と考へてよい」とされ、同作品に対するコメントがある。同年七月二日付杉森久英氏の作者宛書簡をも指摘されているが、その成立過程については、「草稿の方は、(中略)各章ごと別々に書き始められてゐて、各章をそれぞれに書き上げて、後で現在のや

うに順序をととのへて章を入れた模様である」と述べられ、検討の余地を残されているからである。

筆者は作者の文学的軌跡をたどる立場から、作者の創作意図とその背景について再検討したいのだが、そのためにも、作品成立過程の問題を避けて通れないので、本題は統稿にゆずり、本稿では一先ず、肉筆資料の調査に基づく調査報告と、これに関する若干の考察を試み、合わせて作者のこの作品における問題意識のありどころについても、究明してみたい。

## 二 問題点の所在について

前述の筑摩書房版全集のもとになった文治堂版全集(昭34・6)の「余録」における郡司氏の記述は、次の通りである。

元来、この本文の各章は順序を追つて書かれたものではないらしい。草稿では一章出来上る毎に新たに原稿用紙を起して居る点、各章の順序を鉛筆で書き入れてある点その他から推して、全部出来上つてから今の順序に配列したものと考へられる。24頁の表題裏の地図はこの作品を書くに當つて一番先に描かれ、後は参考書などを一切用ひずに地図の上で登場人物の北方南行を辿りながらこの作品を書き上げたといふ。そして最後

の篇は力強く書かれてインクがかなりにじんで居り、終りに午  
後十一時と擱筆した時間まで刻まれてゐる。

従来論の多くは、この指摘に立脚してきた。筑摩書房版全集で  
も、この部分に関する氏の見解に特に変更はない。だが、聞き書き  
の形になっている「26頁の表題裏の地図云々」については疑問があ  
る。作者が作品執筆時に参考書を特に用いなかったとは、筆者も未  
亡人タカ氏から聞いたことがある。しかし、この地図（筑摩書房版  
全集は一巻口絵に収録）の地名・国名は『弟子』中のそれと、ほと  
んど符合しない。この地図は、陳・蔡が亡び、晋の後に（普通、晋  
があるところに、一字塗り消した跡があるから、作者は時代を意識  
している）魏・趙・韓が興った戦国時代初期のものであって、子路  
が生きた春秋時代のものとは、約二百年のずれがある。また、一般  
の歴史地図には載らない、殉子の隠棲地蘭陵の名が書き込まれてい  
る。これらからすると、この地図は、作者が構想中であつた「吃公  
子」（韓非伝）との関連の方が、はるかに強いのである。

次に、郡司氏の「最後の篇は力強く書かれていてインクがかなり  
にじんで居り、終りに午後十一時と擱筆した時間まで刻まれてあ  
る」という指摘と「全部出来上がつてから今の順序に配列した」と  
いう推定との間には、多少の違和感がある。このためでもあろう  
か、この点について様々な解釈や再調査がなされてきた。佐々木充  
氏は「最後の章がやはり最後に書かれたことを意味するのであろ  
う」とし、木村一信氏もこれに同意している。これに対し、濱川勝  
彦氏は肉筆資料を再調査の上「草稿の章の区切り方などからも最初  
から明確な構想のもとにこの作品は書きつがれたものではないよう  
である」とし、奥野政元氏も再調査の上、「草稿の形成過程は、す

べての章が別々に書かれたとまでは言えないようであるが、ただ順  
序正しく章を追って書かれていないことは確かなようである」とし  
て、これを根拠に、「少なくともバラバラに書かれたものを、あと  
で構成し直すというところに作者の意図が窺える」とする。こうし  
た論調の中で、榎林氏は作品構成論に立脚し、郡司説を疑問視して  
いる。

以上、概括したところからも窺えるように、活字化された作品だ  
けを見ている研究者は、章の組み替えがあつたとしても、その影響  
を比較的小さく捉えようとしたり、あるいは章の組み替えがあつた  
とする推定自体を疑問視する傾向が見える。これは作品の完成度に  
疑問を持たないことが、自筆原稿に対する興味の稀薄さと関連して  
いるのかもしれない。これに対し、草稿の実物にあつて調査した  
研究者は、作品の構想に流動性があつたかと推定し、さらにはそこ  
に積極的な作者の意図さえ見ようとする向きもある。しかし、これ  
らの研究者の場合にも、それぞれに指摘された事実の背後に何があ  
つたのか、指摘された事実が作品に及ぼした問題点は何かといつた  
ところまでは考察が及んでいない。

ところで、草稿と定稿との間にほとんど差異の無いこの作品で、  
「全部出来上つてから今の順序に配列し」たり、あるいは、章の組  
み替えをした上で最後の章だけ最後に書くことで、このような作品  
が、はたして本当に出来るのであろうか。形而上学の問題の形而上  
学的揚棄を計ったとされるこの作家が、作品の問題設定の部分に流  
動性を残したままで結論を出すような創作法、あるいはまた、奥野  
氏がいわれる組み直すことを積極的意図するような構想は、果た  
してどのような形で可能なのか。創作方法は、作家の問題意識のあ

り方と不可分のものであるだけに、この問題は、可能な限り明らかにされなければなるまい。

この点に関し、中島タカ氏及びご遺族に依頼して許された筆者が、数次の調査で知り得た事実に基づく考察を付け加えるなら、およそ、次の三点にまとめることができる。

### 三 肉筆資料調査報告と考察

#### (a) 概観について

現在中島家に残る『弟子』の草稿についてだけ見れば、郡司氏のご指摘通りである。粗悪な用紙に書かれ、章の番号も後から鉛筆で記入された模様である。章の構成も、長短さまざまで、幾つかのエピソードを並べた形のものもあるから、これには後から、章の組み替え・加筆・挿入・削除を容易にするかと思われるところがある。

しかし一方、これを作者の他の作品の草稿と比較してみると、一度使用済みの用紙の裏、端数の用紙を寄せ集めて書いた草稿がほとんどである中で、この草稿だけは、粗悪だが真新しい原稿用紙に丁寧に書かれ、加筆・推敲の跡はあるけれども、削除・抹消にあたる箇所は無い。同時期の「南島譚」三篇（『幸福』『夫婦』『雑』）『名人伝』の草稿とは、浄書原稿との間に構想変更がないだけでも、その性格を異にする。浄書前だった『李陵』の草稿にくらべてもはるかに整っている。ただ、作者の浄書原稿は「全く訂正のあとも留めない綺麗なもの」と評されるが、これはそれほどないし、後に指摘する事実からしても、完成した作品を浄書しただけのものではないのは確かである。

しかし、浄書原稿と比較して、浄書原稿に三個所孔子に関する記

述が加筆されているのを除いて、語句・表記以外に異同もほとんどない。浄書原稿の字句の異同もふくめた、異同のある箇所についても、草稿段階での加筆・推敲箇所についても、章の組み替え等によって生じたほころびの、辻つま合わせをしたと考えられる箇所はない。

このように見てくると、この草稿には「第一次浄書」の趣があり、構想の一部を保留するところがあつたとしても、相当完成した構想のもとに執筆された後、一部推敲・加筆して完成した可能性が高い。浄書原稿は、「中央公論」編集者杉森久英氏に渡された。作者にとって初めて大雑誌の注文に応じたものである。一度浄書したものを、上質の用紙に再度浄書したとしても、いささかも不自然さはない。

反面、章の番号が鉛筆で加筆後に入れられているのは、執筆中、まだ一部の章の挿入・差し替え・削除などの可能性を残していたことも考えさせる一面がある。

これらの点について、どのように考えるべきかが当面の問題となるが、この問題を考える際の参考資料として、次のような筆者の調査結果を報告することができる。

#### (b) 草稿に残るしみ、くぼみについて

郡司氏の説明にもある通り、用紙がきわめて粗悪で柔らかいため、力を入れて書いたり、ペンで消したり、しばらくペンが留まつたりした時、その用紙の状態がよくないと、ペンの跡が下の紙に写ったり、インクが紙背までにじみ、下の用紙のその場所に、しみを残している場合がある。これが、新しい紙に書かれているため、

注意して見れば、現在でも、確認できるのである。推敲時の鉛筆での抹消部分については、くぼみとして、残っている場合もある。草稿は現在、二つ折りにして綴じてあるが、しみやくぼみは、用紙を広げて重ねてあった段階でついたものである。(ここに証拠資料として、写真を示したいが、用紙の表裏のインクのにじみ具合と、次の用紙のかすかなしみとを原稿用紙の升目等を手掛かりとして照合することで、はじめてそれと判断できるこの種の資料は、現在袋綴じになっている資料を傷めないで、それと納得できる形の写真を撮ることができない。また、インクのにじみ具合は、紙の状態によるため、表から見ただけではその有無を判断することも難しい。このため写真の提示は割愛した。)これによって、執筆時(推敲時)に重ねられていた紙の順序の切れ続き具合が、かなりの程度まで知れるのである。

たとえば、第一章一枚目の紙は汚れていないのに、二枚目の紙にはひどいしみがある。この事実から、現在の二枚目の直ぐ上の紙は取り捨てられたと推定される。二枚目にも紙背までにじむ消し跡があるが、三枚目の同じ場所にしみを残していない。したがって、現在の二枚目と三枚目の間には別の紙があったと見られる。こうしたことから、この草稿は、完成草稿をただ写したものでないことが想像される。しかし同時に、三枚目五行目の「南山の竹」の「南」の右肩の消し跡、二行目の「犀角を通す」の「角」を「革」に改めた跡には紙背まで通るにじみ跡があり、これが四枚目の同じ場所にしみを残しているなど、連続関係を確認出来る部分も多数あって、全体としては、かなりスムーズに書かれていることがわかる。

以下、全体にわたっての詳細は省略するが、確認出来た事実の中

から、草稿執筆時(推敲時)の各章間の紙の切れ続き具合に関することだけを記せば、次の通りである。

△1▽ 一・二章間、三・四章間、六・七章間、八・九章間は、連続関係が確認できない。

△2▽ 二・三章間は、執筆時・推敲時とも連続していた。二章末(五枚目)の四行・一八字目△感▽を書いた時のにじみ跡、五行・二字目の△評番▽の△番▽を訂正した時のにじみ跡が三章一枚目にしみをつけている。

△3▽ 四・五章間は、推敲時に連続していた。四章末(二枚目)一六行目の△一本気を嘉△み△されたために外なら△ない△ぬことを▽を△怒れられたために過ぎないことを▽に改めた時の消し跡が、五章一枚目にしみをつけている。

△4▽ 五・六章間は、執筆時・推敲時とも連続していた。五章末(三枚目)五行・九字目の△牛▽、六行・一六字目の△綱▽を書いた時、一三行・一字目きた△逆トイフ▽の△を消して、二行目末に△▽を書いた時のにじみ跡が、六章一枚目にしみをつけている。

△5▽ 六章末尾にインクが落ちた濃い跡があり、これは次ぎの紙に何程かのしみを残している方が自然だが、七章一枚目にはその痕跡がない。

△6▽ 七・八章間は、執筆時に連続していた。七章末(四枚目)一行・三字目の△ぬ▽、五行目△孔子一人の為であった▽の△を▽、六行・一字目の△埃▽を書いた時のにじみ跡が、八章一枚目にしみをつけている。

△7▽ この原稿用紙は、多分二枚一帳で市販されていたものだ

が、八章と九章との間で、その帳が替わっている。

△8▽ 九・一〇章間は、推敲時に連続していた。九章末(四枚目)一五行目の△向くと▽の△と▽を消し、△向く▽とした部分、△子若子正の二人であつた▽を△子若と子正の二人である▽に改めたところと、二〇行・一九字目の△如き▽を一度消して書き直したところとのインクのにじみ跡が、一〇章一枚目にしみをつけている。なお、ここでは二〇行目以下に三行ほど書き込みがあり、二行が用紙の枠をはみ出している。これは、後からの加筆と見られるが、九章をこの用紙の中でまとめようとした書き方になっている。

△9▽ 一〇章・一一章間は、執筆時・推敲時ともに連続していた。一〇章三枚目・五行目を△さうして、夫子の歌ふは礼かと訊ねた▽を△さうして訊ねた。夫子の歌ふは礼かと改めた際、△訊ねた▽を鉛筆で消しており、この跡が、三枚後の一一章一枚目までついている。これは推敲時のもの。一〇章末(四枚目)八行目の△蓋る▽の△▽を△▽に改めるため塗りつぶしたところのにじみ跡と、一三行目から一四行目にかけての△白刃前に接るも▽を△接はるも▽と改めた時の、ルビ△は▽の消し跡が、一一章一枚目にしみを残している。この訂正は、ルビの△は▽および送り仮名の△る▽を消し、消した△る▽の横に△は▽と書き、消した△る▽に続けて改めて△るも▽と書いてあるから執筆中のものである。

△10▽ 一一章・一二章間は、執筆時・推敲時とも連続していた。一一章末(四枚目)六行・一字目にくる△己を全うする途を

棄て、▽の△▽と、一一行・二〇字目の△切ないやうな▽の△▽におけるインクのにじみが、一二章一枚目にしみをつけているのは、執筆時のものである。六行・三字目の△道の為▽の△の▽の横のインクの汚れ、一〇行・一九字目の△丈の高い孔子を▽の△を▽を△の▽に改めた際の△を▽の消し跡に残るインクのしみは、推敲時のもの。

△11▽ 一二・一三章間は、執筆時に連続していた。一二章末(七枚目)五行・八字目の△己▽、六行・三字目にくる△善しとする?▽の△▽、八行末の△取るのみ▽の△▽のインクのにじみ跡が、それぞれ一三章一枚目にしみをつけている。

△12▽ 一三・一四章間は執筆時から連続していた。この章については、全集でも指摘はなく、奥野氏も、一三章以下を一気に続けて書かれたものと見ておられるが、一四章は一度用紙を改めて書いた後、その冒頭に、やや異なる筆勢のペンで△孔子が四度目に衛を訪れた時△子路は衛に留まつたのである▽までの約四行を一三章末尾の空白と一四章冒頭の空白を使って加筆している。しかし、一三章末葉(二枚目)の一四行・四字目の△萬▽の誤字訂正跡、一九・二〇字目の△も▽、▽および一五行・九字目・一二字目の△も▽と△浪▽ (これは書きかけての訂正)を書いた跡が、明るい場所やや斜めから透かして見るとくぼみとして一四章一枚目に残っている。

△13▽ 一四章以下は、章ごとに用紙を改めることをやめ、二行の空白を置くだけで章を改めている。

△14▽ 想定できるすべての場合を調査検討してみたが、章が組み替えられたことを積極的に証明できる証拠は、一例も発見出

来なかった。

右の事実を執筆時と推敲時（誤字訂正を含む推敲は、ペンによるものと鉛筆によるものがあるから最低二回以上、何度かにわたるはずだが、ここでは執筆時のものと確定できるものを除き、推敲完了時までを一括して推敲時とした）とに分けて、執筆時に連続していたところを「Ⅱ」で、推敲時に連続していたところを「Ⅲ」で、連続関係を確認できないところを、「Ⅳ」で表わしてみると、次のようにまとめることができる。

一×二Ⅱ三×四／五Ⅱ六×七Ⅱ八×九／一〇Ⅱ一一Ⅱ一二Ⅱ

一三Ⅱ一四Ⅱ一五Ⅱ一六

各章間で「Ⅱ」で示したところに、執筆順序の変動はありえないし、作品の初めほど書き直しが多くであろうと考えれば、全体的に見てかなり順調な書かれ方だと思われるし、後半になるほど順調に書かれているのも自然である。一四章以後では、組み替え・差し替えが不可能な書き方をしているから、一四章以後が執筆される段階では、作品構想も確定していた可能性が高いといえよう。

以上の事実を踏まえ、章の組み替え・挿入等の可能性について、もう少し検討して見たい。この場合、執筆時で連続関係が確認できる部分はまとめて一ブロックと考えることができるから、ブロックごとの組み換えや挿入の可能性を検討してみればよいことになる。ただ、一ブロック丸ごとの差し替えの可能性も考えられるとすれば、ブロックの成立順序をこれ以上追究する手段は、理論上もはやない。しかし、比較的順調に書かれているらしい全体の流れを見た上で、更に加筆があり、もう一つの浄書原稿がある事実を考慮すれば、草稿段階でそこまで考えるのは現実的であるまい。また、筆者の興味

は草稿成立過程が、作品構想の成立といかに関わっているかということにあるので、以下そうした角度からの検討をすすめるため、作品の内容も加味して考えることにする。

内容を簡単に確認すると、一章は子路の入門時のこと。二章は子路入門一月後のことで、孔子と子路との基本的信頼関係が描かれている。三章の陽虎が孔子を招く話は、子路入門後数年してからのこと。六章の孔子が魯に仕えるのは十数年後のことで、この章の末で孔子の遍歴が始まる。八章以後はすべて遍歴中か、あるいはそれ以後のことであり、一四章以後は子路の仕官以後、孔子の最晩年のこととなっている。

また、八章と一三章とには、孔子の遍歴についての総括があり、七章と一三章とでは、七章で顕在化した子路の天に対する懷疑が一三章で解消するといった相互の呼応がある。

こうした事実を考慮する時、一章、二Ⅱ三章、五Ⅱ六章、七Ⅱ八章、一〇章以後の各ブロックの順序が入れ替わること、および、いづれか一つのブロックを欠いた形で作品が構想される場合は考えられない。また、五章で孔子が「初めは此の角を矯めようとしないうちはなかつたが、後には諦めて止めて了つた」とあるから、それから後に、四章の子路の奏瑟に対する批評のようなものが来るはずがない。したがって四章の位置が動くことも考えられない。これに先の草稿調査の事実を参照するなら、推敲完了後の章の組み替えは、考えられないことになる。

以上のことを確認した上で、草稿が章の順を追って書かれなかった可能性を考える場合、作品をコンクリートなものと思えば、構想が明確なほど、かえってどのブロックからでも書けるともいえる

かもしれない。しかし、『文字稿』『名人伝』など初期草稿の残る作品では、執筆過程で成長の跡が見られる。このような作者の作品が、そうであるはずはないから、大体は最初から書かれたと考えてよいであろう。したがって、動く可能性があるのは四章と九章で、考えられる場合としては、推敲以前か執筆中に九章が六章の後にあった場合と、四章・九章が後から加筆・挿入された場合とがある。これらの章は、草稿の用紙で推敲個所以外に前後の連続関係が確認できないからである。

そして前者の場合、九章が六章の次にあっても、九章の内容を孔子が南子にあった挿話を通して、現実社会に対応する時、孔子と子路とでいかにその態度が違っていたかを描いたものと解釈すれば、六章で孔子が齊の美女のために魯を追われることになったことが書かれているから、一応不自然でないのである。(章末の「我未だ徳を好むこと色を好むが如き者を見ざるなり云々」という一文は、後の加筆である。この点については、後に取り上げる。)ただ、九章が六章の後にあった場合は、九章が六章のテーマの一部を繰り返した形になるし、八章の孔子が「之を汚らん哉。之を汚らん哉。我は賈を待つものなり」といったという挿話とも重複して、あまりにもひどい感じになるのは否めない。作者が現在の形にしたのは、子路の内面を提示した七・八章を間に挟んで九章を置き、六章との呼応も保ちつつ、一〇章の葉公子高が、絵の竜を好みながら実際の竜は恐れた挿話とあわせて、諸侯が建前では「孔子の賢の名を好む」ポーズを示しながら、「其の実を好まぬ」実例の一つとするためであったと解される。

そこで残るのは、四章・九章が後からの挿入であった場合である

が、断定はもろん出来ないけれども、次に示す事実を考慮する時、この可能性はかなり高いといえよう。もちろん、九章は移動させ、四章は加筆という場合も、可能性としてはあり得る。

しかし、そうであった場合でも、四章が子路琴瑟の場面、九章が孔子が南子に会う場面を書いたもので、いずれも一つの短い挿話だけで成立しており、作品の骨格的構造を形成する部分ではなく、子路の個性的イメージを補強・強調する部分に相当するから、作品構想の骨格に当る部分は、執筆の当初から確定していたといつてよいであろう。

四・九章を、後からの加筆部分と見た場合、これを支持すると見られる関連資料に、次のような事実があるので、次にこれを指摘しておこう。

#### (C) 草稿の加筆部分について

この作品には、全集の校異で特に指摘はないが、章単位のものとは別としても、草稿段階でいくつかの加筆がある。欄外の書き込みだけではなく、先に触れたように章の末尾に付加したものもある。主なものだけを書き出してみれば、次のようなものである。

#### (1) 二章第二節、——「礼と云ひ礼と云ふ。玉帛を云はんや。

楽と云ひ楽と云ふ。鐘鼓を云はんや。などといふと、大いに欣んで聞いてゐるが、礼の細則を説く段になると俄かに詰まらななさうな顔をする。(欄外加筆)

#### (2) 二章末、——「ずつと後年になつて或時、(不意に)突然、親

の老いたことに気が付き、己の幼かつた頃の両親の元氣な姿を思出したら、急に涙が出て来た。其の時以来、子路の親孝

行は無類の猷身的なものとなるのだが、(章末加筆・挿入)  
(3) 五章第一節、——「請ふ。古の道を釋して由の意を行はん。可ならんか。」などと、叱られるに決つてゐることを聞いた

り、孔子に面と向つてづけつけと「是ある哉。子の迂なるや！」などと言つてのける人間は外には誰もゐない。(欄外加筆)

(4) 七章一行目、——子供の時からの疑問だが、成人になつても老人になりかかつても(一向)いまだに納得できないことに  
変りはない。(欄外加筆)

(5) 九章末、——翌日、孔子等の一行は衛を去つた。「我未だ徳を好むこと色を好むが如き者を見ざるなり」と(嘆じつゝ、孔子は衛を去つた。)いふのが其の時の孔子の嘆声である。

(章末加筆)

(6) 一四章冒頭、——孔子が四度目に衛を訪れた時、若い衛侯や正卿孔叔圉等から乞はれるままに、子路を推して此の國に仕へさせた。孔子は十(四)余年ぶりで故國に戻つたが、子路は別れて衛に留まつたのである。

(7) 一六章第三節、——新衛侯擁立の宣言があるからとて急に呼び集められた群臣である。(欄外加筆)

わずかな用例にすぎないともいえるのだが、これ等を見ると、作者の加筆態度に途中からはっきりと変化がある。九章は特殊であるから、しばらく保留すれば、七章以前では、子路の個性をウィヴィッドに表現するイメージ形成のための加筆であるが、一四・一六章のものは、筋の運びを理解しやすくする状況説明のための加筆である。

これは、一見作品の前半が子路の性格描写に重点があり、後半ではドラマティックな状況の展開に重点が置かれているためと考えられやすいであろうが、そうではない。作品後半にも子路の性格を表わす描写が少なくないからである。一〇章では「陳蔡の扼」に際して、一一章では、隠者に会つた時、一二章では、宋から陳に出る渡船の上での子貢と宰予の話聞きながら、あるいは比干と泄冶の諫死や工尹商陽についての孔子の批評等に関連して、それぞれ子路の行動や心情を表わす挿話が細かに描かれている。一四章以降でも事情は変わらない。ただ、一章から一三章までの挿話と、一四章以降の挿話とは同じく子路の行動・心情を表現するものでありながら変化があるのも事実で、一三章までは、孔子に対比された場合、子路の個性とともに、その卑小性を際立たせていたのに対し、一四章では、蒲の壯士逢を推服せしめ、一五章では小邾ちゅうの大夫・射えきの保証に立つことを断り、一六章では壯絶な死を遂げるといった具合に、一四章以降のそれは、子路の社会的有能さ・深癖さ・果斷さを強調する方向に傾いており、時には孔子を三嘆させることもあつたことが描かれている。しかし、そうした変化はあるとしても、作品後半に、子路の個性を生動させる表現が充分あることを見たと、前半の加筆部分が無かつた場合を考えてみると、その部分での子路の動きが止まつてしまうことに気づかれよう。

そして七章以前の加筆内容をこのように見る時、これが四・九章の内容にも共通するのである。この点からすれば、四・九章も、内容的には前半の加筆部分の延長上にあるわけで、これらを後からの挿入と考えても不自然でないことになるのである。

ここまで見て来ると、この草稿が第一次浄書の趣を持ちながら、



章の番号が、後から鉛筆で書き込まれていることもほぼ了解されるのであるが、これと関連して思い起されることがある。『李陵』において、司馬遷の『史記』記述方法について、次のように述べていることである。

彼も孔子に倣つて、述べて作らぬ方針を執つたが、しかし、

孔子のそれとは多分に内容を異にした述而不作である。(中略) 彼は「作ル」ことを極度に警戒した。自分の仕事は「述ベル」ことに尽きる。事実、彼は述べただけであつた。しかし何と生氣激刺たる述べ方であつたか？(中略) 彼は時に「作ル」ことを恐れる余り、既に書いた部分を読返して見て、それがあ

る為に史上の人物が現実の人物の如くに躍動すると思はれる字句を削る。すると確かに其の人物はハツラツたる呼吸を止める。之で、「作ル」ことになる心配はない訳である。しかし、(と司馬遷が思ふに) 之では項羽が項羽でなくなるではないか。項羽も始皇帝も楚の莊王もみんな同じ人間になつて了ぶ。違つた人間を同じ人間として記述することが、何が「述べる」だ？「述べる」とは、違つた人間は違つた人間として述べることではないか。さう考へてくると、やはり彼は削つた字句を再び生かさぬ訳には行かない。

ここには、明らかに司馬遷への作者自身の感情移入があると考えられるのだが、そうだとすれば、加筆の跡は歴然としている反面、削除に類するところが無いこと等も考え合わせ、章の番号が鉛筆で書かれていたのも、「削つた字句を再び生かす」の可能性を含むためであつたかと考えられて来るのである。断定するつもりはないが、一〇章以降あたりで、自ら確定してきた文体に合わせて、先に示し

た加筆部分と四・九章を「再び生かす」形で加筆・挿入したのであれば、九章末の加筆部分が、一〇章への接続を考慮したテーマの要約になっている理由も、理解しやすくなるのである。これはまた、作者の後期文学における文体確立過程の一面を垣間見せる、一つの実事でもあろう。

#### 四 作品の基本構想について

以上、見てきたことに従つて、加筆部分、あるいは加筆の疑念のある章を一時保留して見ると、作品の基本構想が、かえつてあざやかに浮かび上がってくる面もある。

一章では、「似而非賢者何程のことやあらん」と考へて、孔子を「辱しめて呉れよう」と出掛けた子路が、「己と余りにも懸絶した相手の大きさに圧倒されて」入門する。二章でも、子路は孔子を、「知情意の各々から肉体的の諸能力に至る迄」「実に伸び／＼と発達した見事さ」を備えた人物と認め、孔子は孔子で子路の「際立つた馴らし難さ」に驚くとともに、その「純粹な没利害性」に美点を認めている。ここに、恐らくこの作品の第一テーマが設定されている。孔子と子路との対比的把握は、この段階で確定しているのである。

三章では、子路の孔子への敬愛の情と、子路の直情径行の性格が描かれ、これが孔子の教育では、如何ともし難いことを描き、(四章を保留して) 五章では子路が、「遠慮なく師に反問」しつつ「複雑な思索や重要な判断は一切師に任せて」いる反面、「之程の師にも尚触れることを許さぬ胸中の奥所」を持つ人間であることが、描かれていく。つまり、ここまでで、孔子と子路との基本的人間関係

は、絶対的優位にある者によって相対化される立場の者が、率直に相手を敬愛しながら固有の自己を確認し、優位に立つ者も、相手の美点を充分認める形に成っている。

六章では、こうした師弟関係を確立した孔子と子路、あるいは彼らを中心にした集団が、時代・社会の中で受ける待遇のあり方、あるいは彼らの運命的な社会的地位を描いている。孔子の正しさと能力とは充分証明されながら、為政者の無能に起因する、彼らの社会的不幸の始まりが暗示されているわけである。

七章以降一三章まででは、孔子の遍歴を通じて、子路が自己の運命とその意味を自覚する過程が描かれている。七章では、正義を行うもの不幸な運命を与える天に対する子路の懷疑と、孔子への愛故に子路が己を孔子の盾と位置づける姿が描かれるが、一三章では、孔子の「天下万代の木鐸」としての使命と「孔子及びそれに従ふ自分等の運命の意味」を理解するに至っている。この間、八・一二章では、孔子に対する子貢等弟子たちの批判を聞き、(九章は保留して)一〇・一一章では、諸侯が「賢の名を好んで、其の実を欣ばぬ」ため、理想実現の機会を持ってないばかりか、「陳蔡の扼」に遭ったり、隠者の批判を受けたりする孔子を見ている。子路はこうした、孔子批判と孔子の社会的運命を見る中で、孔子の使命とそれに関わる自己存在の意味を、自分で確認していくのである。

一四章以降では、かくして自己存在の意味を自覚した子路が、自己流の生き方を実践していく。一四章で、子路は、蒲における治績に、孔子の思想をあざやかに実現して、孔子を三嘆させる。しかし、一五章で、「斉の陳恒がその君を弑した」に際し、孔子が哀公に「義の為に斉を伐たんことを請」うたのを、「ただ形を完うする

為に過ぎなかつた」と解し、反撥している。このような子路が、己の生き方を完うしたのが、一六章である。衛の政変に際し、大勢は決しているにもかかわらず、「其の禄を利した以上、其の患を救はねばならぬ」とする固有の倫理観に従って、彼は最後まで戦って死ぬ。しかし、その際も、己が孔子の教えに従う者であることを自ら確認するかのように「見よ！君子は、冠を、正しうして、死ぬものだぞ！」と絶叫するのである。

このように見てくると、浮かび上がるのは、絶対的優位にある孔子によって相対化される卑小なる存在としての子路が、己の卑小さと共に彼固有の自己を確認し、孔子の「天下万代の木鐸」としての使命と、そのもとで「それに従ふ自分等の運命の意味」を理解することによって、彼固有の倫理観に従って生き、かつ孔子の弟子として安んじて死ぬ姿である。

ここには、作者が、かつて『光と風と夢』のステイブンスンに仮託して、「神のあやつる交響楽の中で／俺は調子の外れた弦ではないか？」と恐れた問題、すなわち自己の才能に疑念を抱く者の「自分の一生の評価の問題」に関わる懷疑に、一つの解決法が見いだされているといつてよい。

そして、この点に作者の問題意識があったとすれば、作中で、子路の救済が確定した時、子路の卑小性が、より明確にされていることが必要であろう。草稿における前半の加筆部分と、四・九章とが、こうした方向で書かれていることは事実である。

以上が、作品成立過程及び、これにかかわる創作意図に関して、筆者の考察し得たことである。

なお、この作品において作者が見いだした問題解決法が、作者自

身の文学的軌跡の中で、どのように位置づけられるべきかについては、稿を改めて検討したい。

註(1) 奥野政元『中島敦論考』(桜楓社 昭60・4)『弟子』

——他者との出会い」参照。

水上英廣「中島敦、人と文学」、中村光夫ほか編『中島敦研究』(筑摩書房 昭53・12)収録参照。

篠田一士『弟子』をめぐって、中村光夫ほか編『中島敦研究』(筑摩書房 昭53・12)収録参照。

(2) 佐々木充『中島敦の文学』(桜楓社 昭48・6)『弟子』  
——おのれを支えるもの——」参照。

(3) 木村一信『中島敦論』(双文社 昭62・2)『弟子』論  
——「己が性情」への指向——」参照。

濱川勝彦『中島敦の作品研究』(明治書院 昭51・9)「弟子」参照。

(4) この点については東北大学助教授浅野裕一氏のご教示を得た。記してお礼申しあげる。

(5) 断片二十九・三十の作品集構想メモにこの名がある他、二十四・二十五に韓非抄・殉子語録、これに関連する中国古代年表があり、作品構想メモも見える。

(6) 槇林滉二『弟子』の構想』(国語展望・別冊・現代文研究シリーズ13—中島敦』昭58・5 尚学図書)参照。

(7) 筆者は昭和55年夏の初対面以降、調査の便宜を計って頂いた。記してお礼申し上げます。

(8) 深田久弥「中島敦君の作品」(ツシタラ2 昭49・11)参

照。

(9) 藤村猛『弟子』試論』(安田女子大学紀要第16号 昭63・

2)に、同様の指摘がある。

(10) 具体的な場所の詳細については、株式会社国際マイクロフ  
ォト研究所(〒231 横浜市中区尾上町3の29)発行「中島敦  
マイクロフィルム資料」リール2、No.58と124 コマを参照し  
て頂けると幸甚である。

——島根大学教授——

き 又